序

文化人類学者の落合一泰は、従来の文化論を大きく「地域文化研究」と「文化関係論」に分けたうえで、まず「地域文化研究」については、しばしば領域の内部論理を追求するにとどまっているという問題点を指摘している。また「文化関係論」については、西洋からの一方向的な文化表象の側面をとりあげてそれを批判的に検討することに終始しているのだが、そもそも一方向性を堅持するパラダイムこそが植民地主義的な言説を構築してきたのであると述べて、「地域文化研究」と「文化関係論」の双方を批判している。そのうえで、「外部の視線に感応し、それを自己表現に取り入れさえするという、世界の被支配者文化にしばしば観察される文化的自画像の生産と消費のプロセス」を明らかにしなければならないと主張している(1)。本論稿も、基本的には同じ問題関心から出発している。

本論稿では、自らの文化的な表象に外部の表象を「取り入れ」る契機として「自己領有」という概念を用いている。自己領有とは、他者が表象する自己の文化についての表象を自分のものにしたり、あるいは別の他者についての表象を自らのものにし、あるいはまた異なる文化的な表象形態のもとにあらわされる表象をとり込むなど、さまざまなしかたで自己の文化的な表象が構成されていくさいの、表象のとり込みと自らを表象する営為をさしている。ここではこの言葉を、〈自らのものとすること〉(我有化)を意味する「アプロプリエイション」appropriation にあてた訳語として用いている。appropriation という言葉は、表象をめぐる議論ではいまやなじみ深いものとなっているが、この言葉そのものが指示する意味内容は、〈占有〉〈盗用〉、〈流用〉、〈横領〉とテクストによってさまざまである。さしあたりここでは、上述したように〈他者によ

東京外国語大学 博士学位論文 Doctoral thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

る／についての表象を自らのものにすることによって自己を表象すること〉という本論の議論にそって、「自己領有」という訳語をあてたことをまず確認しておきたい(2)。

ところで、「文化的自画像の生産」ないし文化的な自己表象は、独立後のラテンアメリカでは、大きく分けてふたつの領域からの自己領有として析出される。独立後のラテンアメリカに植民地主義的な欲望を抱くヨーロッパ人の表象するラテンアメリカについての言説からの自己領有と、現地の民衆の口承的な表現形態からの自己領有である。本論稿では、19世紀初頭に独立したアルゼンチンを対象に、このふたつの領有のありかたを分析したうえで、そこに構成されている文化的な自己表象が、国民主義的な同一性と接合されているモメントを問題化しようとするものである。

またここでは、こうした文化的な自己表象の批判的検討と並行して、支配／被支配の二元論に回収されてしまうような批判の構造そのものを脱構築する批評の可能性を模索している。ともすると植民地主義的言説や支配的言説の批評は、そこへの批判を強めるあまり、逆に支配的言説の堅固な一体性を強調することになり、結果的に支配／被支配の二元論を強化してしまうきらいがある。だが、そうした硬直した二元論そのものが、国民主義の源泉として仮構された土着文化言説を支えてきた点は見逃すわけにはいかない。こうした考えのもとに、支配的言説への批判をおこなう一方で、その内部の揺らぎやずれといったものに着目することで支配的言説の誇示する力の脱構築をおこない、また社会的周縁部の固定化をつうじて自己の権威を確かなものにしようとする支配的言説の力にあらがう言説の分析を試みている。

本論稿の副題が「言説の政治」となっている理由もここにある。かたや、独立以降のアルゼンチンでポスト＝スペインの座を狙うイギリスの植民地主義的な欲望の言説の力学が働いており、他方でその言説に抵抗しようとしていながら、ヨーロッパに承認されたいばかりに、その植民地主義的な言説に寄りそう現地の男性クリオージョ知識人の言説の力学がある。他方で、イギリス人旅行者のであれクリオージョ知識人のであれ、支配的な言説につごうの良いように自己領有された現地の民の声や身振りは、しばしば支配的なテクストの叙述規範を宙吊りにしたり中断したり、異議申し立てをしたりしている。テクスト内に書きこまれているそうした被支配者の声や身振りのもつ反―叙述的なものの力。このようなさまざまな力の強度が錯綜する場としてテクストを読み解き、言説の一元的な解釈に還元されえないさまざまなあらわれを分析するという意味が、この

東京外国語大学 博士学位論文 Doctoral thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

副題にはこめられているのである。

なお、全体のおおまかな構成は以下のとおりである。第1章では、19世紀なかばに男性クリオージョ知識人によって書かれた規範的なテクストを子細に検討することをつうじて、非ヨーロッパ世界に関する表象を自己領有する契機と、同時にラプラタの民の口承的な諸表象を自己領有する契機を分析する。まずそれがどのようにヨーロッパの支配的な言説と共犯関係をとり結んでいるかを論じ、次に、テクストのなかに書きこまれた口承的な諸表現がテクスト内でどのような機能を保持しているかを明らかにする。第2章では、19世紀前半からなかばにかけて書かれたイギリス人旅行者のラプラタ紀行を中心に、そこに書きこまれている現地の非エリートの声や身振りが、どのようなかたちで植民地主義的な言説からなかば自律的な機能を保っているかを分析する。第2章の補論においては、19世紀末の旅行記にみられるいくつかの叙述の質の変容に注目している。第3章では、19世紀後半から20世紀はじめにかけてのアルゼンチンで、どのような文化表象の変容が生じ、それがいかなる回路をつうじて人種主義と結びついているかを論じている。

資料については、できるかぎりもとのテクストに戻って分析することとしたが、いくつかのものに関しては入手が困難であったため、翻訳や編纂されなおしたものを使用せざるをえなかった。各資料の詳細な情報については文献表を参照されたい。

また、参照した二次文献については、啓発をうけたものだけに限って記載してあることをお断りしておく。